

第 21 号

2002 年 1 月



編集発行
中国四国部会事務局
松山大学経営学部内

2001 年度徳島大会シンポジウム 報告

撰南大学 佐藤正志

2001 年度の部会大会は、11 月 24・25 日に徳島市の四国大学で開催された。24 日の個別報告に続いて、翌 25 日にシンポジウムが行われた。今回のシンポのテーマは、「吉野川流域・藍作の展開」と題され、以下のような 4 本の報告とそれへのコメントがなされた後、全体討論が行われた。

問題提起・報告 1 「吉野川流域農村(阿波北方) —なぜ藍作なのか」 三好昭一郎 (四国学院大学)

報告 2. 「中世吉野川の水運と藍」 福家清司 (阿南工業高等学校)

報告 3. 「19 世紀の阿波藍商経営と史料」 天野雅敏 (神戸大学)

報告 4. 「阿波藍の衰退と藍作農民の北海道移住」 平井松午 (徳島大学)

コメント: 竹内庵 (四国大学)

全体討論: 司会・三好昭一郎、佐藤正志 (撰南大学)

まず、問題提起を兼ねた三好報告は、吉野川流域農村部での藍栽培について記された徳島での初出史料として、宝治元年 (1247) の「見性寺文書」を紹介され、藍の試作

が平安時代にまで遡ること、また、文安 2 年 (1445) の「兵庫北関入船納帳」からは、中世において吉野川中流域の美馬・麻植両郡を中心として藍作の一定の拡がりがあったと推定された。近世に入ると藍作中心地は、下流域の名東・名西・板野 3 郡へと移行するが、これらの流域農村は吉野川の大氾濫原にあり、洪水がもたらす客土によって藍の連作が可能となっていた。しかし、水田開発は藩の経済力や当時の技術力では到底困難であったために、吉野川流域農民にとっては藍より他に選択肢がなかったのだということが強調された。

2 番目の福家報告は、中世の京畿における藍の大量消費が、吉野川の水運と海上輸送の発展による阿波からの藍移出によって支えられ、その積出港では鎌倉後期段階に川関が設置されるなど、在地領主による経済的収奪の対象となるほどに発展を遂げていたこと。また、京都大山崎油座神人の活動は、在地領主と対抗しながら、河口部の港津「別宮」を集散基地とし、畿内方面との間に太い流通ルートを確立させていたことなどを論じられた。さらに、「兵庫北関入船納帳」に関して、従来の史料解釈に疑問を呈し自説を展開した。まず、「納帳」には基本的に川港の掲載が見あたらないことから、今谷明氏が吉野川中流域に「見性寺」を比定したことは誤りであり、経済力

を持つ紺屋の存在などから、中世における阿波藍の主産地がすでに板野郡にあったと、三好説に異論を唱えた。また、「納帳」によると、阿波藍の移出時期はほぼ通年にわたっていたことから、藍の出荷は「生葉」形態のままでは不可能であり、すでに中世から「菜（すくも）」などに加工されて出荷されていた可能性に言及し、この点においても中世段階での菜加工技術の導入を否定的にみられている三好氏と見解が別れた。

次に報告された天野氏は、藍商の経営史料の分析から、18～19世紀におけるその経営の動向について報告された。まず、18世紀における急速な藍作の発展にともない板野郡の吉野川氾濫原を中心に藍商の成長がみられたが、そのなかの三木与吉郎家の事例が紹介され、同家が19世紀にはいり関東売藍商へと成長する過程で、決算書が多帳簿制複式決算へと進化し、財産計算に加え損益計算が行われていたこと。この三木家の帳簿は、葉藍・藍玉取引に関する基礎的情報を精細に記載しており、仕入地域や取引数量、価格、代金の決済形態などが判明することなどから、藍業の伸展を背景に、個別経営において「経営情報」の蓄積が大きく進んだことを指摘された。また、18世紀後半に急成長した藍商の木内家文書からは、明治20年代の不況期に藍部門が停滞すると、土地集積に乗り出し、明治20年代以降には、酒造業経営や有価証券投資などに力を入れ始めたことが分かった。木内家はその後明治30年代に関東市場進出に失敗し、経営的には挫折するが、板野郡を中心とした藍商のなかから、地域内の近代産業への投資を行い、近代産業発展を担う地方有力資産家が成長したことについても言及された。

4番目の平井氏は、阿波藍衰退と北海道移住の関連を主題に取り上げ、報告された。

明治以降の農村窮乏と過剰人口の処理をめざし、徳島・香川両県では北海道移住が選択されたが、徳島から北海道への移住者は明治～大正期には6万人にも及び、西日本最大の北海道移住県となる。こうした大量の移住者を輩出した直接的な要因としては、明治10年代中頃における鮭粕など、藍生産コストで大きな比重をしめる肥料代の高騰や地主制の成立による小作地率の上昇、経営規模の狭隘性、さらに水害の多発などが相まって藍作経営を圧迫し、さらに外藍（インド藍）流入などによって前途に危機感を抱いた藍作農民から移住者が多発したことを指摘された。

しかし、広島や山口両県のごとく海外移民ではなく、徳島県が北海道移住に特化したことから、移住の背景として政治的要因について注目すべきであると強調された。明治初年の稲田騒動を契機とした稲田家臣団の北海道静内郡入植では、同地を北海道における藍業のフロンティア地域とすることをめざしたものであり、多くの藍作農民の誘因となったこと。その後、貴族院議長となった旧藩主蜂須賀茂韶やその人脈に連なる県会議員などの勧誘や、1892年に県知事関義臣によって発表された20万人移住計画などにみられるように、農村における藍の不振や過剰人口対策として、政治的誘導がなされたことが指摘された。

以上のように、シンポの報告内容は、時的には中世から明治後期に及ぶもので、まさに阿波藍の生涯全体を対象としたものであった。また、藍という商業的農産物を切り口にして、社会経済史のみならず、経営史や歴史地理学の視点からの報告もあり、多彩な内容であった。

コメンテーターの竹内氏からは、19世紀における阿波藍をめぐる市場構造の変化をふまえ、領外市場での株仲間の「独占」はどのように機能したのか、また、明治30年

代の衰退期を経て藍商が近代的資本への転化を図ったとき、何が近代に継承され、断絶したのかという課題が提示された。

最後の全体討論では、三好・福家両氏の見解の対立をふまえ、藍が阿波において特産物として成立した時期とその契機について、とくに木綿衣料品の普及との関わりなどが議論された。また、明治期の藍衰退と藍商経営や北海道移住との関連性をいかにとらえるのかという点などについて、活発な質疑があり、議論が盛り上がった。この討論で問題になったいくつかの論点のなかに、今後の阿波藍研究の新たな課題と方向性がみえてきたように思われた。

ところで、開催校の四国大学は、吉野川に面し、かつての藍作の中核地帯にも立地しており、シンポのテーマにまさにうってつけのロケーションにある。ただ今回のシンポには地元からの出席者が少なく、最近の阿波藍に関する徳島県内での研究状況を象徴していたようで、多少残念に思った。しかし、藍の盛衰こそが徳島の地域経済史、とくに近現代のありようを大きく規定してきたのは事実であり、さらに大きな経済構造の変化の波が押し寄せつつある現在において、地域の経済社会の変化を見通す上でも、本シンポを契機に、地元の研究者が全国の研究者との交流を拡げながら、阿波藍史の研究が活性化することを期待して、報告を終えたい。

徳島大会に参加して

広島大学 勝部真人

はじめに

近年私が中四国部会大会に参加したのは、'97年広島大学（東千田キャンパス）での大会以来実は久しぶりであった。加えて2日目の全体討論が始まる前に私用で

会場を後にしているから、そのような者が大会の参加記を書く資格があるのかかなり迷ったのも事実である。しかし逡巡しているうちに断るべき期限も過ぎてしまったため、資格の有無をさて措いて書かざるを得ないことになった点をはじめにお断りしておきたい。

1. 自由論題報告のバラエティ

自由論題では、以下の6本の報告を聞くことができた。近年話題となっていた株式持ち合いの問題を射程にとらえつつ、戦前紡績業の株主構成について歴史的アプローチを行った田中三樹報告、生口島における中規模造船所に焦点を当てて造船業における「二重構造」をとらえようとした落合功報告、呉鎮守府建設において造船施設が二期工事への延期を余儀なくされた工事の遅れに分析を加えた千田武志報告、松山大学所蔵岡田温家文書を用いて大正期の農業技師の家における家計分析を試みた何濤報告、16世紀ロシアの修道院領の分析から農村共同体のあり方を探ろうとした細川滋報告、京釜鉄道の株主募集にあたった尾崎三良の動きと岡山・広島・山口3県における株主応募との関連を探究した木村健二報告など、いずれも重厚な報告であったように思われる。

一々の感想を記すことはできないが、個人的な関心からいえば、何報告の愛媛県農会におけるきわめて早い段階からの記帳活動に興味をもったところである。

報告者は、大学院生から若手・ベテランまで多彩な顔ぶれであったし、内容的に見ても、やや近代日本にウェイトがかかっていたものの、中世ロシア史も含められる等事務局における事前準備のご苦労がしのばれる思いである。地方部会の大会においてこうしたバラエティを確保するのはなかなか困難なことと考えられるが、これは必要なことのように思われるし、今後も努

力すべき目標であるように思われる。

2. シンポジウム所感および雑感

シンポが、ご当地阿波の藍作をテーマにして開催されたのは、私にとっては大変ありがたかった。三好昭一郎氏の問題提起につづいて、中世吉野川水運と藍について述べた福家清司報告、19世紀板野郡の藍商三木家・木内家の経営史料を扱った天野雅敏報告、藍作衰退から北海道移住へと展開していく明治期の徳島県を論じた平井松午報告など、これまたいずれも興味深く、大変勉強させていただいた。ただ前述のように全体討論を聞くことができなかったことが、返すやも残念であった。

こうした企画も、できれば今後つづけていくことができればと思われる。

蛇足かもしれないが、最後に個人的な思いを少し述べておきたい。近年中・高校や発掘などの現場では地道に研究を進めることが極めて困難になりつつあるが、しかしなおそうした努力を続ける人々はかなりおられることと思われる。そうした人々に日頃の成果を発表する機会を提供するのは地方部会大会の重要な社会的責務であると思われるし、今回のシンポでもそれが実現していたのは私個人としても救われる思いがしたのである。

今後もそうした努力は続けなければならないだろうし、その点でも準備に当たられた事務局および佐藤正志氏はじめ徳島県内の関係者の方々に改めて御礼を申し上げます。

「大正期一農業技師の家計分析」を発表して

松山大学大学院経済学研究科
何 涛

現在、松山大学大学院にて岩橋先生のご

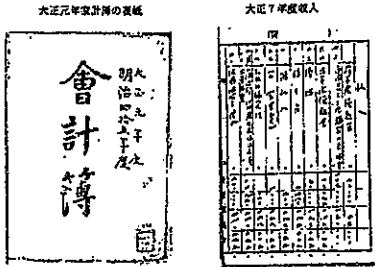
指導のもと日本経済史研究に取り組んでいます。今回、中国四国部会の徳島大会に参加させていただきました。そして私自身も報告させていただきました。個別報告、シンポジウムでは活発な質疑応答があり、日本の学会の様子を知ることができました。大会初日は正直なところ私自身が報告することもあって、準備はそれなりにしていましたが、かなり緊張していました。各先生方の重厚な報告を聞かせていただきながら、あらためて自分の研究の未熟さを痛感したことも事実です。大会初日の報告のあと懇親会にはいりました。緊張した雰囲気の大大会報告とうってかわって懇親会は和やかな雰囲気のもとですすめられ、はじめて緊張感がほぐれました。懇親会の席上で身近に先生方と話す機会をもてたことは私にとり大きな収穫でした。

今回、私の報告は大正期から昭和期にかけて記帳されていた岡田家家計簿を整理、分析し、そこから大正期個別家計の生活様相を描き出すものでした。研究対象とした岡田家の岡田温は松山近郊農村で農家の長男として明治3年に生まれ、小学校の臨時教員を経て明治29年東京大学農科大学にすすんだ人物です。かれは同大学を明治32年に卒業し、全国農事会に就職、やがて温泉郡農会技師、さらに愛媛県技師にまなっています。大正10年帝国農会幹事に就任し、帝国農会のリーダーとして活躍するとともに代議士にもなります。その後昭和12年に帰郷、昭和28年80歳の生涯を終えます。

岡田家の家計収支をみますと、収入は俸給手当、農業収入、旅費収入などからなり、支出は飲食費、被服費、教育費、交際費、職業費、旅費、農業諸費、臨時費などでありました。岡田家の収入は、主に岡田温の給与所得でしたが、それ以外に農業収入が加わっていました。支出では種子、肥

料など農業関係の支出が無視できません。岡田家の家計は、サラリーマン家計とはいえず、むしろ兼業農家の性格を強くあらわしていると言えます。

岡田家計簿の一部



岡田家計を分析した結果、次のような特徴が浮きぼりになりました。消費者物価指数「家賃を除く総合指数」(1934-1936=100)を用いて実質化された大正15年-昭和2年の内閣統計局「家計調査」における給料生活者収入の平均値105.7円と比較すると、本家計大正元年-大正10年収入の平均値は376.0円となり、かなり余裕のある家庭であったことがわかります。また大正11年「新中間層の東京市における実態的動向」における官吏、公吏の平均世帯5人の支出106.5円(名目額)と比べ、本家計は522.4円(消費支出191.2円、非消費支出331.2円)となり、新中間層よりも上層の家計であったと考えられます。

明治期から大正期にかけて家計簿史料は非常に少なく、この時期の日本人の生活水準や収支構成の把握は難しい面があります。先行研究として、中村隆英著『家計簿から見た近代日本生活史』などをあげることができます。研究をはじめて間もないのですが、私の見たかぎりでは、かならずしもこの方面の研究はこれまでじゅうぶんおこなわれてきたとは言えません。むしろこれからの新しい研究領域と思えます。今後、さまざまな事例を通して近代日本の

生活実態を解明し、さらに将来的には日本と他の諸国の比較史的研究にまで発展させていければと願っています。

2001年度徳島大会

徳島大会は四国大学で11月24、25日の両日開催されました。

11月24日(土)自由論題報告(個別報告13:30-17:40)

報告1. 「戦前わが国紡績業における株式所有構造」 報告者 田中三樹(福山平成大学)、司会者 高橋 衛(福山大学)

報告2. 「利益無き繁忙と輸出船受注」 報告者 落合 功(広島修道大学)、司会者 下野克己(岡山大学)

報告3. 「呉鎮守府の建設と開庁」 報告者 千田武志(広島国際大学)、司会者 佐藤正志(摂南大学)

報告4. 「大正期一農業技師の家計分析」 報告者 何 涛(松山大学大学院)、司会者 田村安興(高知大学)

報告5. 「16世紀ロシアの農村共同体—ヨシフ・ヴォロコラムスキー修道院領の場合—」 報告者 細川 滋(香川大学) 司会者 富岡庄一(広島大学)

報告6. 「京釜鉄道株式会社株主分析—岡山・広島・山口を中心として—」 報告者 木村健二(下関市立大学)、司会者 松本俊郎(岡山大学)

11月25日(日) シンポジウム
テーマ: 「吉野川流域・藍作の展開」(9:00-12:00)

司会者 三好昭一郎(四国学院大学)、佐藤正志(摂南大学)

問題提起・報告1. 「吉野川流域農村(阿波北方) —なぜ藍作なのか」

報告者 三好昭一郎

報告2. 「中世吉野川の水運と藍」

報告者 福家清司 (阿南工業高等学校)
 報告 3. 「19 世紀の阿波藍商経営と史料」報告者 天野雅敏 (神戸大学)
 報告 4. 「阿波藍の衰退と藍作農民の北海道移住」報告者 平井松午 (徳島大学)
 コメント 竹内 庵 (四国大学)
 全体討論

2001 年度 事務報告 (2000 年 11 月 12 日-2001 年 11 月 24 日)

1. 事務・活動報告

2000 年 11 月末 広島県幹事に勝部眞人氏
 12 月末 社会経済史学会本部 (早稲田大学) に 2000 年度島根大会開催 (島根大学) を報告
 2001 年 1 月 1 日 中国四国部会ホームページ開設
 5 日 徳島県幹事に佐藤正志氏
 30 日 中国四国部会会報 (第 19 号・2001 年 1 月) 発送
 4 月 12 日 中国四国部会大会開催校・四国大学に書面にて施設利用のお願い
 6 月 8 日 中国四国部会会報 (第 20 号 2001 年 6 月) 発送、2001 年度大会報告者の募集
 18 日 吉崎一弘氏から寄付金 3000 円の提供、部会の財源に組み

入れる

8 月 21 日 第 1 回理事会 (電子会議室) 開催、
 議題 1. 役員改選、
 2. 2001 年度徳島大会の報告者・報告校
 題・司会者について
 3. 2001 年度会計報告 (中間報告) について、
 4. 2002 年度開催地・開催校の確認について (山口県・山口大学)
 5. 2003 年度開催地・開催校候補について (愛媛県・松山大学)、
 6. 監事の選出について
 報告事項: 中国四国部会活動報告、会員数動向
 9 月 3 日 報告者にプログラム等について連絡
 4 日 第 2 回理事会
 10 月上旬 徳島大会プログラム発送

2. 会員数の動向

年 度	会 員 数
1996	152 名 (1996. 10. 31 現在)
1997	163 名 (1997. 10. 31 現在)
1998	175 名 (1998. 11. 3 現在)
1999	172 名 (1999. 11. 6 現在)
2000	172 名 (2000. 11. 11 現在)
2001	166 名 (2001. 11. 15 現在)
	退会者 8 名、加入者 2 名

◆◆ 社会経済史学会本部からの連絡 ◆◆

国際経済史協会ブエノスアイレス大会 (XIII International Economic History Congress, Buenos Aires, 22-26 July 2002) のプログラムが届いています。

プログラムは大会組織委員会のホームページ (www.ih.net/XIIICongress) でみるこ

ができます。大会参加登録と参加費支払いは下記の方法でおこなうことができます。

- (1) インターネットで www.ch.net/XIIICongressを開き、必要事項を記入する。
- (2) ファックスで、セコンド・サーキュラーに添付された Registration Form に必要事項を記入して、+54-11-4725-7010 へ送る。

2001年度会計報告(2000.11.12-2001.11.24)

収 入		支 出	
前年度繰越金	404,318	封筒・葉書・コピー用紙代	12,088
会費徴収(11月15日現在)	124,000	会報発送費(第19,20号)	39,000
内 訳		アルバイト代	20,000
95年度 1口 1,000		通信費(理事・幹事)	4,970
96 1口 1,000		徳島大会補助費	30,000
97 1口 1,000		会議費	15,000
98 2口 2,000			
99 9口 9,000		小 計	121,058
2000 21口 21,000			
2001 79口 79,000		次年度繰越金	410,541
2002 9口 9,000			
2003 1口 1,000			
寄付金	3,000		
利 子	281		
合 計	531,599	合 計	531,599

2002年度中国四国部会役員

代表理事 岩橋 勝
 理 事 松尾 寿(島根)、下野克巳、森元辰昭(岡山)、富岡庄一、千田武志(広島)、及川 順(山口)、村山 聡(香川)、三好昭一郎(徳島)、平田桂一(愛媛)、田村安興(高知)、鳥取は空席
 幹 事 勝部真人、藤田哲雄(広島)、木村健二(山口)、原 直行(香川)、佐藤正志(徳島)、高橋基泰(愛媛)
 監 事 在間宣久、川東舜弘
 顧問 内藤正中、比嘉清松、渡辺則文、高橋 衛、小川國治、神立春樹、事務局 平田桂一(事務局長)、渡邊孝次
 社会経済史学会理事 岩橋 勝(松山大学)、加藤房雄(広島大学)

事務局

〒790-8578 愛媛県松山市文京町 4-2
 松山大学経営学部 平田桂一研究室内
 社会経済史学会中国四国部会事務局
 e-mail hiratak@cc.matsuyama-u.ac.jp
 Tel 089-925-7111(代表)

社会経済史学会中国四国部会大会一覽

年度	開催期日	大会開催地	報告数
2003		愛媛県・松山大学	
2002	2002年11月を予定	山口県・山口大学	
2001	2001年11月24,25日	徳島県・四国大学	10
2000	2000年11月11,12日	島根県・島根大学	16
1999	1999年11月6,7日	岡山県・岡山大学	10
1998	1998年11月7,8日	高知県・高知大学	11
1997	1997年11月1,2日	広島県・広島大学	11
1996	1996年11月2,3日	香川県・香川大学	14
1995	1995年11月4,5日	山口県・山口大学	10
1994	1994年11月5,6日	岡山県・岡山大学	10
1993	1993年11月6,7日	愛媛県・松山大学	9
1992	1992年11月7,8日	広島県・広島大学	12
1991	1991年11月9,10日	島根県・島根大学	7
1990	1990年11月17,18日	徳島県・鳴門教育大学 他学会共催	3
1989	1989年10月14,15日	鳥取県・鳥取県立博物館	6
1988	1988年11月26,27日	広島県・広島経済大学	8
1987	1987年10月28,29日	高知県・高知大学	6
1986	1986年12月6,7日	岡山県・岡山大学	9
1985	1985年11月30日、12月1日	香川県・香川大学	7
1984	1984年10月13,14日	山口県・山口大学	8
1983	1983年11月19,20日	広島県・広島大学	9
1982	1982年10月2,3日	愛媛県・松山商科大学	11
1981	1981年10月4日	島根県・島根大学	8
1980	1980年11月23日	鳥取県・鳥取県立博物館	11
1979	1980年1月20日	徳島県・徳島大学	8
1978	1978年10月10日	広島県・広島経済大学	10
1977	1978年1月22日	高知県・高知大学	10
1976	1977年1月23日	岡山県・岡山大学	10
1975	1976年1月18,19日	香川県・香川大学	18
1974	1974年9月29日	山口県・山口大学	9
1973	1974年1月20日	愛媛県・松山商科大学	11
1972	1973年1月28日	広島県・広島大学	3

会費振替口座

郵便振替番号 01670-9-61454

加入者名 社会経済史学会中国四国部会

— 編集後記 —

第 21 号をお届けします。発行が遅れましたこと、お詫びいたします。昨年 11 月開催されました徳島大会につきまして佐藤正志先生、勝部真人先生、何涛さんに玉稿をお寄せいただきました。

地方大会ではシンポジウムが定着したように思えます。多くの研究者が集う場として一層の発展を願うところです。会報に書評も掲載したいと思います。ご投稿をお待ちしています (K. H)。